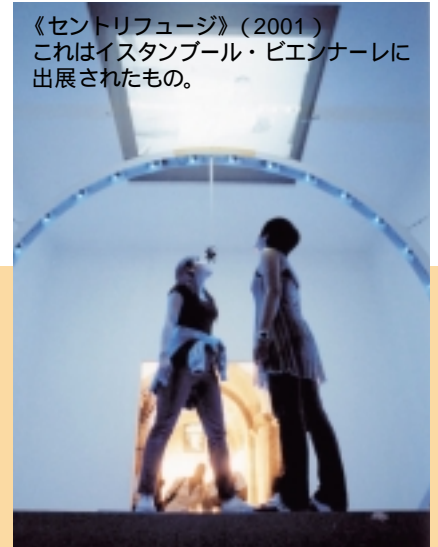


《視聴覚交換マシン》(1993)



《セントリフュージ》(2001)
これはイスタンブール・ビエンナーレに
出展されたもの。



八谷和彦 + 幸喜俊

はちや かずひこ

こうき たかし

インヴォーク有限会社代表 かわい おたけ 河合 歩

神出鬼没のレイトショー

メディアアーティスト・八谷和彦という名前を知らなくても、ピンクのぬいぐるみのくま『モモ』をはじめとするペットが電子メールを届ける^{たの}楽しいアプリケーション《ポストペット》のことは見たことがあるという人は多いはず。パソコンのディスプレイの中のお部屋に住み着いたペットが、気ままにふるまって、ときどきよそのパソコンに出かけたり、よそからひとのペットがやってきたりする。たまにはおやつをあ



《ポストペット2001》

げたり丸洗いしてやると喜んだりするし、そのうち勝手に『ひみつ日記』を書いてみたり、かまってやらないと家出してしまったりもする。

ペットの中にはロボットらしき『シンゴ』もいるけれど、八谷さん自身はそれほどロボットの形をした作品を発表しているわけじゃない。ただその作品には藤子・F・不二雄のマンガの発明小道具のようなアイデアが詰まっている。これは話を聞いてみなくちゃね。

「1991年かな、二人組のプロジェクトで《SMTV》って海賊放送みたいなことを始めたんです。ちょうどその頃、どうもテレビに視たい番組がないなと感じていたんですよ。でも世の中にはいくらでも興味深いことはあるはずで、雑誌やパソコン通信には面白さがあった。きっとテレビと世の中にギャップがあるんだと考えたんです。テレビって、郵政省(現・総務省)から免許を受けた会社が放送しているんです。でも、技術的に同じことをするのは不可能じゃない。だったらやってみようと思いついたんです。

VHSビデオデッキ2台で編集した番組を、100~200mの範囲にだけ届く出力のトランスミッターを秋葉原で買って、普通のテレビで視られる、でも既存のテレビ局とバッティングしないUHF21chとかの周波数帯域を選んでゲリラ放送を続けたんです。でもアナーキーな活動がしたかったわけじゃなくて、あくまで自分たちで視たい番組を作ってそれを放送することを目的にね。いま自分が気になる人のところにインタビューに押しかけて、それを放送しました。流行とかには関係なく好きなことをやってる人ってやっぱり面白いんです。

その頃ぼくはCI(コーポレートアイデンティティ。会社のロゴに代表される企業イメージ戦略のデザイン)コンサルティング会社のサラリーマンで、ひとのお金を使ってなにか作ってるけれど最後まで責任を取れるわけじゃない自分の仕事にちょっと飽き飽きしていたところがあって、一人でやれることに関心があったんです。それはアート作品じゃなくてもよかった。作品というよりパブリックアクセスを仕掛けたかった。